

チベットにおける論理学研究の問題

——学問寺の基礎教育課程——

小野田 俊蔵

一

流伝後期(phyi dar)のチベットの仏教学、特に顯教学を考へる場合、まず考慮されねばならないのはサンブ gsang phu 大学問寺の存在であろう。サンブ大学問寺はアティーシャ Atisa の弟子であつたゴク・レクペーシエーラブ rNgog legs pa'i shes rab がサンブのネウトク sNeu thog に一〇七三年に建立した寺で、その後多くの大学者を輩出した⁽¹⁾。中でも高名なのがレクペーシエーラブの甥で数多くの訳業を残したゴク・ロデンシエーラブ rNgog Blo ldan shes rab (1059—1109)であり、そ

してチベットの中觀学や論理学の歴史に特異な足跡を残したチャバ・チューキセンゲ Phya pa Chos kyi seng ge (1109—1169)である。

チャバは中觀学において、後世の多くのチベット人学者がチャンドラキールティ Candrakirti 系の中觀を重視するのに対して、バーヴァヴィヴェーカ Bhāvaviveka の系統、すなわち後に「自立論証派 (Rang tgyud pa)」⁽²⁾とよばれる立場をとつたと伝えられるが、彼はまた、論理学においても後世の多くのチベット人学者と立場を異にする。そもそもチャバの時代にはチベットに新旧二派の論理学が存在していた。すなわちマ・ゲウエーロトウー

Ma dGe ba'i blo gros に始まる「旧論理学派 (Tshad ma rnying ma)」と、前述のゴク・ロデンシェーラプが『プラマーナヴィニシユチャヤ *Pramāṇaviniścaya*』を訳出し研究したことに始まる「新論理学派 (Tshad ma gsar ma)」の二学派である。⁽³⁾ チャパが座主をしていた頃のサンブ大学問寺は後者の伝統の中にあり、チャパはその立場からチベット撰述文獻では恐らく最初の論理学綱要書『*ユウラ bsDus grwa*』⁽⁴⁾ (495) は『*Tshad ma'i bsdus pa*』を著したと伝えられる。残念ながら同書の現存は確認されていないが、ロデンシェーラプから伝えられた『プラマーナヴィニシユチャヤ』に準拠しつつもチャパ自身の独創的な考えが織り込まれたものであったと考えられる。チャパ自身の努力と、そしてツァンナクパ・ツントウーセンゲ *Tsang nag pa brTson 'grus seng ge* やツァク・ワンチュクセンゲ *rTsaqs dBang phyug seng ge* など「八大獅子 (Seng chen bryad)」とよばれたチャパ門下の秀逸たちによる研究講説によって盛んになったこのサンブの『プラマーナヴィニシユチャヤ』研究の伝統も、十三世紀初頭にチベットに渡ってきたシャ

ーキャシニリーバドラ *Salvāśrībhadra* が、インドから新しくもたらした『プラマーナヴァールッティカ *Pramāṇavarttika*』研究の新しい動きによって大きく影響を受けたのである。⁽⁵⁾ この第三の論理学派の隆盛はサキャ *Sa skya* 派の大学者サキャ・パンディタ・クンガーゲーツ *ヘン Sa skya pandi ta kun dga' rgyal mtshan* (1182—1251) とその弟子のウニクパ・リクパーセンゲ *リユグ pa Rigs pa'i seng ge* の力によると伝えられている。⁽⁷⁾ ちなみにサキャ・パンディタは論理学に関して『リクテル *Tshad ma rigs pa'i gter*』⁽⁸⁾ と題する名著を残している。さて、ゲルク *dGe lugs* 派の派祖ツォンカパ *Tsong kha pa Blo bzang grags pa'i dpal* (1357—1419) は彼の教学の多くをサキャ派のレンダワ *Red mda' ba* (1349—1412) から受けているが、『プラマーナヴァールッティカ』の相承もサキャ派の系統であり、⁽⁹⁾ 相承の系譜から言えばツォンカパはシャーキャシニリーからサキャ・パンディタへと伝わった第三の論理学派の流れを汲むものである。ただし、このレンダワやその師ニャペン *Nya pon kun dga' dpal* の系統はサキャ派の本流とは異質のもの

であったかも知れないと言われている。⁽¹⁰⁾ このことが後にツォンカパの教学を批判したサキャ派の諸論師タクツァ *ンロツァーワ・シェーラプリンチェン* *sTag tshang lo tsā da Shes rab rin chen* (1405—?) やニラムパ・ソナムセンゲ *Go ram pa bSod nams seng ge* (1429—1489) などと、サキャ・パンディタの『リクテル』に批判的であったゲルク派の諸論師タルマリンチェン *Dar ma rin chen* (1364—1432) やケートウブジ *mkhas grub rje* (1385—1438) といったシャムヤン・シェーパ *'Jam dbyangs bs-* *had pa* (1648—1722) などとの二派の間で交された批判応酬のひとつの遠因であるとも考えられるのである。

いずれにせよチベットにおけるインド論理学書の研究は徐々に『プラマーナヴィニシユチャヤ』から『プラマーナヴァールッティカ』中心へと移行してゆくのである。それらの動きの中で「新論理学派」の流れを汲むチャパの論理学説は「インド論理学書の研究」という領域では姿を消してゆくのであるが、その反面、サキャ派やゲルク派のツェンニール *mTshan nyid pa* (顯教哲学者) の間では、そのチャパ流の独特の思考の精緻さが注

目されつつ、⁽¹³⁾ 特にゲルク派ではやがて大学問寺が徐々に整備されてゆくにつれて、チャパが創始したと伝えられる『*ユウラ bsDus grwa*』の学習が僧堂教育での基礎学習として導入されていったのである。

前述したようにチャパ作の『*ドゥラ*』は現存が確認されていないが、ロンドラマ・ガワンロフサン *Klong rdol bla ma Ngag dbang blo bzang* (1719—1794) の伝えるところによれば、⁽¹⁴⁾ 『*kha dog dkar dmar*』⁽¹⁵⁾ 『*rdzas chos ldog chos*』⁽¹⁶⁾ 『*spyi dang bye brag*』など十八の章目からなる書物であったようだ。これらの章目のほとんどは後世の同じく『*ドゥラ*』と題されるゲルク派の一連の文獻にもそのまま継承されており、チャパがサンブ大学問寺で目指したインド論理学のチベットの消化という問題は、後世のゲルク派大僧院での『*ドゥラ*』あるいは『*リクラム rigs lam*』とよばれる基礎学習課程として姿を変えつつ受けつがれ、深められていったのである。

二

さて、ゲルク派のウー地方三大根本道場、すなわち

ガンデン dga' Idan' テーピン 'Bras spungs' セラ Se
の三大僧院の履修課程が今日伝わるように整備充実さ
れたのは、ダライラマ七世のケーサンギャムツォ bskal
bzang rgya mtsho (1708-1758) の時代であったといわ
れる⁽¹⁵⁾。三大僧院のそれぞれは複数のタツァン grwa tsh-
ang (学堂) によって構成され、さらにそれぞれのタツァ
ンは複数のカムツェン khams tshan (出身地別に設けられ
てゐる学寮) によって成り立つてゐる。履修の課程はタ
ツァンによって異なる。ガワンジャヤン Phur bu loog
Ngag dbang byams pa (1682-1762) の報告によれば、
一七四四年頃、ガンテン寺にはチャンン Byangtse'
シャルツェ Shar tse の二学堂、デーピン寺にはローヤ
ルリン Blo gsal gling' トン Sgo mang' チャン bDe
yang' シャンロン Shag skor' トアーサヤリン Thos
bsam gling (rgyal ba) 'ヒヤンン Dul ba' カンパ sNgags
pa の七学堂、そしてセラ寺にはギャ rGya' ヒヤテン
'Brom steng' トアー sTod pa' メーン sMad pa の旧
四学堂とチューパ Byes pa' カクパ sNgags pa の諸学
堂があったという。これらの内で二十世紀中頃まで名を

とどめるのはガンテン寺のチャンツェとシャルツェの二
学堂、デーピン寺のローセルリン、ヒヤン、デヤン、カ
クパの四学堂、そしてセラ寺のメーパ、チューパ、カク
パの三学堂である。カクパというのは密教の儀軌を専門
にする学堂であるからツェンニ mshan nyid (顯教哲
学) の履修課程は含んでいない。

各学堂での課程は微妙に相異なるが、大綱は五函 (Po
ti lnga) とよばれる五つの主要課題の学習である。五函
とはすなわち、

- 一 'Tshad ma (因明' pramāṇa)
- 二 'Phar phyin (般若' prajñāpāramitā)
- 三 'dBu ma (中観' madhyamaka)
- 四 'Dul ba (律' vinaya)
- 五 'mNgon mdzod (俱舍' abhidharmakośa)

である。これらの五つの課題はそれぞれ複数のチンタ'dzin
grwa とよばれる学級に細分され、その学級の次第を徐
々に登りつめることによって最後には博士 (ゲシェー dge
bshes) の位が与えられるのである。全部の課程を終了す
るためには少なくとも十数年の歳月を必要とする。ここ

で注目しておきたいのは、般若、中観、律、俱舍のそれ

それが『現觀莊嚴論 mNgon rtogs rgyan, Abhisama-
yalanikṛatā』『入中論 dBu ma la 'jug pa, Madhya-
makavūṭṭarā』『律經 'Dul bai mdo, Vinayasūtra』
『俱舍論 mNgon pa mdzod, Abhidharmakośa』などの
特定のインド原典を核として学習されるのに対して、因
明のみがインド原典を用いずに学習されるという点であ
る。課程の名称も「トッパ」あるいは「リクラム」と総
称され、「因明 tshad ma」とは称されないのである。

因明が内明 (nang rig) であるか否かは古来から論議の
あった所であるが⁽²⁰⁾、あるいはそのような考慮が働いてい
たのかも知れない。いずれにせよこの課程内ではインド
論理學書は直接は使用されず、チヤンの『トッパ』を始
源とする各種のトッパ書がテキストとされるのである。

次頁の表はそれぞれの学堂出身の informants から得た
チンタの名称についての情報を筆者の責任でまとめたも
のである。デヤンとシャルツェについては十分な情報が
得られなかった。作表にあたっては Sera-jeh Monastic
University, Bylakuppe, India の Jhado Tulku 師の助

力を得た。ここに記して謝意を表わしたい。

それぞれの学堂には学堂ごとに定められた学堂教科書
(イクチャ yig cha) がある。一九七二年から一九七四年
にかけて New Delhi から出版された *Madhyamika
Text Series*, 8 vols は各学堂における中観のイクチャ
を集成したものである。一般に言って学堂ごとに特定の
学者の一連の作品をイクチャに採用するのが普通であ
る。例えばヒヤンではジャムヤンシニエーパおよびその弟
子筋の作品が学習され、ローセルリンではパンチエン・
ソナムタクン Paṅ chen bsod nams grags pa (1478-
1554) のものが、セラ寺のチューパではジェツンパ・チ
ューキゲンツェン rJe btsun pa Chos kyi rgyal mtshan
(1469-1546) のものが、そしてメーパではケートツァン・テ
ンパタルギエー mkhas grub bsTan pa dar rgyas (1493-
1568) の作品が、とりわけ重要である。ちなみにガン
デン寺のシャルツェとチャンツェはそれぞれデーピン寺
のローセルリンおよびセラ寺のチューパとそのイクチャ
の系統を同じくする。

	Dga' Idan		'Bras spuugs		So ra	
Byang rise		Blo gsal gling	Sgo mang	Smad pa		Byes pa
RIGS LAM.....	1 bedus chung pa.....	1 bedus grwa 'dzin dang po	1 kha dog dkar dmar	1 bedus grwa		1 bedus chung
(BSDUS GRWA)	2 bedus chen pa	2 bedus grwa 'dzin gnyis pa	2 kha dog gong ma	<bscus chung>		2 bedus 'bring
	3 rigs rigs		3 bedus 'bring	<bscus chen>		3 bedus chen
			4 bedus chen			<blo rigs>
			5 rigs rigs			<rigs rigs>
			6 blo rigs			

PBAR PHYN	4 skabs dang po	3 stu gsun dikyi 'khor	7 don blun cu	2 gzhung gar pa	(don blun cu)
	5 skabs gsun pa	4 gcig du bral	8 gzhung 'og ma	3 gzhung trying pa	4 gzhung gar pa
	6 skabs gyis pa	5 drang nges	9 gzhung Gong ma	4 gzhung trying Gong ma	5 gzhung trying pa
	7 skabs bzhi pa	6 sems bskyed	10 skabs dang po	5 skabs gyis pa	6 zur bkoi gar pa
	8 skabs bgyad pa	7 dge 'dun nyi shu	11 phar phyin	6 skabs bzhi pa	7 zur bkoi trying pa or(phar phyin pa)
	9 drang nges 'dzin grwa	8 skabs bzhi pa		7 zur bkoi	
DBU MA	10 dbu ma gar pa	9 dbu ma gar pa	12 dbu ma gar pa	8 dbu ma gar pa	8 dbu ma gar pa
	11 dbu ma rnying pa	10 dbu ma rnying pa	13 dbu ma rnying pa	9 dbu ma rnying pa	9 dbu ma rnying pa
'DUL BA	12 mdzod 'dzin grwa	11 'dul ba 'dzin dang po	14 mdzod	10 'dul ba gar pa	10 'dul ba gar pa
	13 'dul ba 'dzin grwa	12 'dul ba 'dzin gyis pa		11 'dul ba rnying pa	11 'dul ba rnying pa
		13 'dul ba 'dzin gsun pa			
MDZOD		14 mdzod 'dzin dang po	15 bkai'rams 'og ma	12 mdzod gar pa	12 mdzod 'dzin grwa
		15 mdzod 'dzin gyis pa		13 mdzod rnying pa	
		16 mdzod 'dzin gsun pa		14 'dzin grwa gsun pa	
				15 'dzin grwa gyis pa	
				16 'dzin grwa dang po	
				17 bkai'rams 'dzin grwa	13 bkai'rams
				16 bkai'rams Gong ma	14 bla rams
				(ming btags 'dzin grwa)	

リクルムの課程で使われるイクチャを各学堂ごとに整理してみよう。デーペン寺のローセルリンではスナムタクパの『ドゥラ』並びに彼の『ローリク』、『ターリク』が使われていたという。ユマンではジャムヤンシェーパの弟子ガワಂತァシー Ngag dbang bkra shis の『エウラ』、『ジャムヤンシェーパの『ローリク』と『ターリク』』、そしてチョクラウセル mChog lha 'od zer の『ラトウードゥラ』 Rwa stod bsdus grwa⁽²⁴⁾ が副読本として使われていたようである。この書は他の諸学堂でもイクチャとして採用されている。セラ寺のメーパではタクパシェーリンパ Grags pa bshad sgrub の『ターリク広説』 rTags rigs rgyas pa と『ターリク略説』 rTags rigs bsdus pa ヤンチェンガーウエーロトウー dByang can dga' bai blo gros の『ターリク要略』 rTags rigs kyi sdom と『ローリク要略』 Blo rigs kyi sdom' チナハンパ・イヤンヨーギヤムツォ Chu bzang bla ma Ye shes rgya msho の『ローリク』と『ターリク』⁽²⁵⁾

三

使われていた。セラ寺チエーパではブルチヨク・ヨンジン Phur leog Yongs 'dain の『ユウラ』、『ローリク』、『ターリク』⁽²⁵⁾が、ガンデン寺のシャルツエではスナムタクパのものが、そしてチャンツエではジンパ・チューペルギヤムツォ sByin pa Chos 'phel reya msho の『ローリク』と『ターリク』⁽²⁷⁾が使われていたようである。

さて、そのようなイクチャを使って進められるリクラム（広義のドゥラ）の課程には大きく分けて三つの段階がある。すなわち「ドゥラ bsdu grwa」と「ローリック blo rigs」と「ターリック rtags rigs」である。今日の言葉で言えばそれぞれ「存在論」「認識論」「論理学」ということになるうか。この種の分類は前述のイクチャの区分でもあるが、実はそのみでなく、より古い他のチベット撰述論書にも見ることが出来る。例えばサキャパンディタの『リクテル』の章建ては (a) shes bya'i yul (認識をされる対象)、(b) shes byed kyi blo (認識の主体としての心)、(c) blo des yul rtogs pa'i tshul (その心と対象を「正しく」把握する方法) の三つを軸に構成されている。また、ツォンカパの作った論理学綱要書 *Don gnyer yid*

kyi mun sel⁽²⁸⁾の三章建つて、(a) yul (対象)、(b) yul can
[「認識の」対象を持つてゐる(心)]、(c) yul de rtogs pa'i
thabs (その対象を「正しく」把握する方法)となっている。
これら上記二書の分類方法はそのまま「ドゥラ」「ロー
リック」「ターリック」というこの三つの基礎学の教科内容
を指すものといつてよい。

四

各学堂で用いられるドゥラ書類の内容はかならずしも
全同ではないが、主要な点では一致している。そこそ
代表的な課題のみを拾い上げて「ドゥラ」「ローリック」
「ターリック」という三段階の基礎学の内容を概観してみ
よう。

「ドゥラ」の課程は学堂によつては二つ、あるいは三つ
以上のチンタ 'dzin grwa (学級)に分けられるところも
ある。まず各学堂に共通して見られるのは「kha dog
dkar dmar」や「gzhi grub」の学習である。「kha dog
dkar dmar」はそれがチンタの名称になっている学堂も
あるが、直訳すれば「白色と赤色」という意味で、六境

の細分を例にとつて「白色」と「色」との包括関係や、
「すべての赤色は色である」というような全称命題と「或
る(種)の色は赤色である」というような特称命題との
差異の説明がなされるのである。さらに「gzhi grub」
の学習では経量部のシステムに則った存在の分類が学習
される。ここでも各概念間相互の包括関係や同義関係は
特に注意される。以上が初級の課題であつて、次に中級
になると抽象的存在の学習に入る。ここでは「ldog pa
(概念)⁽²⁹⁾」「rgyu dang 'bras bu (因と果)」「spyi dang bye
brag (類と種)⁽³⁰⁾」「brel ba dang 'gal ba (関係項と反対項)⁽³¹⁾」
というような論理的思考のために不可欠な諸概念が規定
され吟味されるのである。これらの規定の中にはチャパ
の創始になるものが多い。さて、上級に入ると「thal
'gyur (prasaṅga 帰謬法)」の学習が行なわれ「論理関係」
がひとつの課題とされる。そもそも「ドゥラ」学習の目
的は、上記のような諸存在の説示もさることながら、そ
れ以後の僧院学習をつづけてゆく上で不可欠になる論争
技術の習得、そしてそのための論理的な思考能力の訓練
ということが重要な要素なのである。

次の「認識論」を扱う「ローリック」の課程では「認識」
を対象とする種々の観点からの分析が試みられ、学習者
が重層的に心を把握するように構成されている。すなわ
ち 'tshad ma 'vishad min (新鮮でかみ合せする認識が否
か)による分類、rtog pa 'v rtog med (分別が伴うか否
か)による分類、rang rig 'v gzhan rig (その認識が内
的であるか外的であるか)による分類、sens 'v sens byung
(心王と心所)による分類などである。ここに注目されね
ばならないのは 'tshad min が「dpyad shes」「yid dpyod」
「snang la ma nges pa」「the tshom」「log shes」の五
つに分類されるが、これに 'tshad ma の二つすなわち
「mugon sum gyi 'tshad ma」や「ries su dpaḡ pa'i
'tshad ma」を加えて、心を二つに分類する方法 (blo
rigs bdun du dbye ba) がこの課程で学習されるが、そ
れはチャパによつて説かれていた説であるという点であ
る。ここにもチャパの影響が見うけられるのである。
さて、「論理学」を扱う「ターリック」では、インド的
な論理学の説明方法がそのまま採用されている。すなわ
ち 'tshul gsun (因の三相)から説き起し、rtags yang

dag (三種の)正しい論拠)と rtags lhar snang (三種の)
誤った論拠)が説示されるのである。

五

「ドゥラ」「ローリック」「ターリック」このリクラム課程の
三段階の学習をとおして学習者は正しい論理的な推理と
はどのようなものなのか、そしてその推理を駆使してど
のように論争(教義問答)を行なうか、を習得するのであ
る。推理の基準となるものは言うまでもなく定義(mtshan
nyid)である。学習途上で習得されるあらゆる概念や術
語はあくまでそれに付された定義をとおしてのみ把握す
るように訓練される。彼ら頭教哲学者が「ツェンニール
mtshan nyid pa」と称されるゆえんもそこに存するの
である。

彼らツェンニールパの学習法では口頭による問答が最も
重要視される。その問答の作法を習得するのがリクラム
課程の重大な目的のひとつなのである。

僧院内の問答にも、学堂ごとの対抗戦の形をとるツォ
クラン tshogs lhangs とよばれるものもあるが、学堂内

で日常的に行なわれる問答はタムチャー *dam bca'* とよばれ、或る一定の区切りがつくまで質問をする者は質問を述べ、答論をする者は答論だけをつづける、あるいは答論をする者だけが固定して質問者は交替する、という仕方をとる。そして、質問者(普通 *rtso'd pa po* とよばれる)が与えるきつかけに従って答論者(*dam bca' ba*)が命題(*dam bca' ba*)を立て、それに対する論難を質問者が行ない、答論者がそれに対して再び答える、という様に問答が進められていく。質問者が行なう質問は、「*thal phyir*」とよばれるきわめて形式化された推論式の作法に則った質問でなければならない。一方、答論者のほうには問答の流れを左右出来る選択権はなく、ただひたすら自らの答論の斉合性のみに心掛けねばならないのである。これら問答の作法の概略については別稿⁽³⁸⁾を参照されたい。

さて、学習者にとって、このような問答の作法の習得はその後の般若、中観等々の学習をするためには不可欠のものである。なぜなら、それらの課程で使われるイクチャのほとんどが「*thal phyir*」とよばれる問答体で

著されているからである。Scherbatsky も指摘するよう⁽³⁴⁾に、この文章形式の創始者はチャパであるとする伝承がある。チャパの教学はこのようにリクラムの課程のみでなくゲルク派僧院の頭等学習課程全般に影響をおよぼしているのである。

註

- (1) サンプ大学問寺の歴史および教学については、羽田野伯猷「チベットにおける仏教観の形成について」『文化』第二九卷、昭和四〇年、一七二—一七六頁参照。
- (2) チャパは自立論証派の諸論師の著書に註釈を書いているのみでなく、チャンドラキールマの教学を批判しつつたゞとせられぬ。THE BLUE ANNALS, tr. by George N. Roerich, Calcutta, 1949, (以下 BA) pp. 332—334。松本史朗「Tson kha pa 独自の中観思想について」『日本西蔵学会会報』第二十七号、昭和五十六年の註(2)等参照。
- (3) BA, p. 70. 参照。
- (4) BA, p. 333. チャパは他にも多くの大乘論典に註釈を著したとせられぬ。Leonard W.J. van der Kuip, *Phya-pa Chos-kyi seng-ge's Impact on Tibetan Epistemological Theory, TIBETAN STUDIES*, University of London, 1971, p. 99, II

- versität Zürich, 1978, pp. 163—177 の註(2)参照。
- (5) A klu rin po che Shes rab rgya mtsho (1803—1875) の「編輯書」(Lokesh Chandra, *Materials for a History of Tibetan Literature*, Satapitaka Series, Vol. 30, New Delhi, 1963) の「nam 'grel gyi skhor」(頁四九)の「No. 11804 Tshad ma'i bsdus pa yid kyi mun sel rang 'grel dang bcas pa. No. 11805 Tshad bsdus yid kyi mun sel rnyang pa gcig.」の書名が見えぬ。
- (6) チャン門上の学者たちに対するチャンの教学をその中継承したわけはなから。特に中観に關する弟子の多くが反対の立場を採ったようだ。BA, p. 334. 参照。
- (7) シャーキャシヨリーに關する、羽田野伯猷「*kaśmīra-mahāpāṇḍita "Śākyasībhadrā"*」『文化』第二二卷五号、一一二頁、に詳し。
- (8) Ibid. 一七頁。および同氏「チベット仏教學の問題」『文化』第一八卷三号、七四頁参照。
- (9) シャーキャ派の THE COMPLETE WORKS OF THE GREAT MASTERS OF THE SA SKYA SECT OF THE TIBETAN BUDDHISM. 東洋文庫、一九六八年、第五卷、一五五—二六四頁に同書中の自註「*Tshad ma rjes pa'i gter gyi rang 'grel*」の語句が載せられている。大谷 No. 6138, *Rje rin po che blo bzang grags pa'i dpa' gyi gzan yig*, TTP. Vol. 153, 158-5-3. へ

- (10) 松本史朗「Sa skya paṇḍi ta の教学と關する」考察『日本西蔵学会会報』第二十四号、昭和五三年、七頁参照。
- (11) 御牧亮「*blo gsal grub mtha'*」について『密教学』第一五号、昭和五三年、pp. 95—111. の註(9)をよむ。松本史朗「*sTag tshah pa* の「Tson kha pa 批判」について」『日本西蔵学会会報』第二十八号、昭和五七年、一一—四頁参照。
- (12) フラマンのシャーカン批判について、松本史朗「Tson kha pa 独自の中観思想について」『日本西蔵学会会報』第二十七号、昭和五十六年、四一—七頁。および同氏「シャーカンの中観思想について」『東洋学報』第六二卷第三・四号、一九八一年、一七四—二一一頁参照。
- (13) 例えばチャンの創始とせられ「*rdzas ldog*」について『ラマナーツァン』(註(2)参照) p. 68に「*rdzas ldog 'di sngar nas sa dge'i mtshan nyid pa kun la grags che zhiṅ*」とある。
- (14) Klong rdol bla ma ngag dbang blo bzang, *Tshad ma rnam 'grel sogs gtan tshigs rieg pa las byung ba'i*

- ming gi grangs* (cf. Tohoku No. 6545), 2b2 (Sata-pitaka-Series, Vol. 100, p. 663)
- (15) 壬生台輝「ラマ教の歴史」講座仏教第四卷『中国の仏教』二二五—二五二頁、昭和四二年、二四七頁参照。ただし、チン・サンギキヤタシキの努力を「地」に「人」という限定が付けられている。
- (16) ラマ創建当時はいわゆる旧四学堂のみであつたようだが、Mus stras pa rin chen (Jam dbyang chos rje の直弟子)がチーペン寺から来た時と多くの出入を認められて、彼らを迎へたるに Sne'u dpal 'byor rgyal po 及び Dpon sa bu khrid dpal 'joms などの二人が、新しい学堂を作り、それがチーペン学堂といはれるようになった。
- (17) Sde srid Sangs rgyas rgya mtsho, *Vaidurya sar po*, ed. by Lokesh Chandra, Śatapiṭaka-Series, Vol. 12, p. 121. 参照。
- (18) Phur bu lcog Ngag dbang byams pa, *Gruwa sa chen po bzhi dang rgyud pa stod smad chags tsul pad dkar 'phreng ba*, THREE KARCHACKS, Geden Sungrab Minyam Gyumphen Series, Vol. 13, pp. 46—169 参照。
- (19) 課程終了の年限は徐々に短くなつていゝたものと見られる。Geshe G. Lodro, *Geschichte der Kloster Universitäts Drepung*, Wiesbaden, 1974, p. 236. 以下、御牧克巳「チベット語仏典について」『続メタローラと仏教文化』二八三—三一六頁、昭和五五年、三〇五頁参照。
- (20) インクチャの中江チベット撰述のものが bod gzhung といはれるのに対してこれらインダ撰述のものは rgya gzhung といはれる。
- (21) Stcherbatsky, *Buddhist Logic*, Vol. 1, 1932, p. 46 等参照。
- (22) インダ撰述の論理学書が全く研究されなつてはなかつた。これらの研究はジェンゲンチー Jian dgun chos とははれる法会で集中的に行なわれる。これは毎年チベット暦の十一月初めから十二月十五日までの間に、セラ・チーペン・ガンデン等の大僧院の学僧が一同に会して行なわれるものである。その際は『ブラマーナヴァールニヤカ』の研究が中心となり、タルマリニンチェンやケー・トウペンジの書物が使われ研究が深められるところ。
- (23) *Go nang yig cha*, Dharamsala, 1973, 所収。
- (24) *The Collected Works of Jam-dbyans-bzad pa'i-rdo-rje*, New Delhi, 1972—74, Vol. 15 (Geden Sungrab Minyam Gyumphen Series, Vol. 54), pp. 177—301.
- (25) Cf. Tohoku No. 6858. 最上チンポのインダ撰述出版された。Rwa stod bsdus grwa, Dharamsala, 1980.
- (26) Cf. Tohoku No. 6857. 同書の章目について、拙稿「bsDus-grwa の学習について」『印度学仏教学研究』第二七巻第一号、一九六一—一九七頁参照。

- (26) Cf. Shunzo Onoda (ed.), *THE YON'S 'DZIN RTAGS RIGS, A Manual for Tibetan Logic*, Studia Asiatica No. 5, Nagoya 1981.
- (27) Cf. Tohoku Nos. 6859, 6860.
- (28) Cf. Tohoku No. 5416. チンポから洋装テキストが出版された。Sde bdun la 'jug pa'i sgo don gnyer yid kyé mun sel, Varanasi, 1972.
- (29) 拙稿「Idog pa について」『印度学仏教学研究』第二八巻第二号、六五四—六五五頁。以下、同「Idog-chos について」『印度学仏教学研究』第二九巻第一号、三八五—三八二頁参照。
- (30) 拙稿「spyi (類)とbye-brag (種)について」『印度学仏教学研究』第三〇巻第二号、九一五—九二二頁、参照。
- (31) 拙稿「'brel-ba (関係項)と'gal-ba (反対項)について」『印度学仏教学研究』第三二巻所収予定、参照。
- (32) チン・ヤン・G Tshad ma rig pa'i gter gyi dka' ba'i gias rnam par bshad pa sde bdun rab gsal, 『チキヤ派全書』第二二巻所収、にそのことが述べられている(17-2-1)。Kuip 氏による指摘がある。註(4)の同氏論文 p. 170 参照。
- (33) 拙稿「チベットの僧院に於ける問答の類型」『仏教史学研究』第二二巻一、一—六頁参照。
- (34) Stcherbatsky, *Buddhist Logic*, Vol. 1, p. 58. (以下、同著、仏教大学助手)